

令和元年度第三十二回夕暮祭短歌大会入賞歌

秦野市長賞

(敬称略)

荒波へ寝転ぶように帆を立たせ四肢すみずみまで風となりゆく

神奈川県川崎市

久保田 聡

秦野市教育委員会教育長賞

悲しみを吸い取るように吾子の手が我が背をさする負うたその背を

神奈川県秦野市

三武 操

秦野短歌会会長賞

マガモらは濠に水脈引き泳ぎくる水面のファスナー開けるように

京都府京都市

後藤 正樹

山田吉郎選者賞

父の背を撫ずる思いに皺のぼし形見のシャツの虫干しをする

茨城県常陸大宮市

小田倉 量平

寺尾登志子選者賞

雨月なら忘れて次を待つものを六文字だけの君の返信

東京都板橋区

花月 大師

佳作

ざんぐりと鋤を起せばたけのこは根の切るる音わが掌のなかへ

千葉県我孫子市

中川 尚美

暮れのこる空へ投網を打つごとく群れ飛ぶ椋の声の喧し

埼玉県本庄市

白藤 巳玲

足湯するにはかに重き登山靴これから帰る雑踏の街

神奈川県秦野市

加藤 三朗

紙ひこうきにエンジンつけて飛びたいな霞む丹沢施設より見ゆ

神奈川県厚木市

篠崎 俊二

読みさしの歌集をとぢぬしまらくは灯りし思ひ紡ぎてをれば

神奈川県秦野市

福島 健太郎

ゑんどうを剥ぎつつ幼は数へをり「七人かぞく」「五人かぞく」と

高知県須崎市

中平 妙子

羊蹄の雪どけ水はさわらびの迷い路を抜け野に広がりぬ

北海道虻田郡俱知安町

山内 昌人

田草焼く煙の中に入るたびに影絵のごとく人のなりをり

神奈川県足柄上郡中井町

石黒 弘

ジャムを煮る厨で君に書く手紙余白にぼたり春色滲む

兵庫県南あわじ市

山田 恵子

はつなつの雨つぶ弾き傘揺らし声をそろえて下校のサンバ

東京都足立区

小野 史

髪止めを口にくわえて諸手上げ髪束ねいる妻は真顔で

山口県周南市

熊本 芳郎

灘の酒積みて高速ひた走り秦野あたりは夕暮れのころ

北海道岩見沢市

金子 幸男

一瞬で すぎてく日々は 風になり 私の背中を 押ししてくれる

東京都葛飾区

佐藤 駿真

夕暮れに落ち葉と手を取り踊る風路上ライブの調子に合わせ

神奈川県海老名市

井上 菜月

世間から一步離れて鳴く鳥己が鳥と知りて鳴くのか

大阪府大阪市

野呂 裕樹

昼顔は初夏の音符か草木の翳りに奏す無垢なティンパニ

沖縄県那覇市

上運天 英蔵

昭和橋渡りて桜マーケット母は話せり今あるやうに

神奈川県秦野市

石原 次子

青々と伸びたる稲田に流れ来しちぎれた和紙のような浮雲

神奈川県小田原市

井上 靖

リハビリで四肢鍛えつつ春を待つ雪まじりの風窓に見ながら

山口県光市

中原 伸二

富士ヶ嶺の雪解も含む相模川水岐れきて我が田潤ふ

神奈川県高座郡寒川町

金子 寿宣